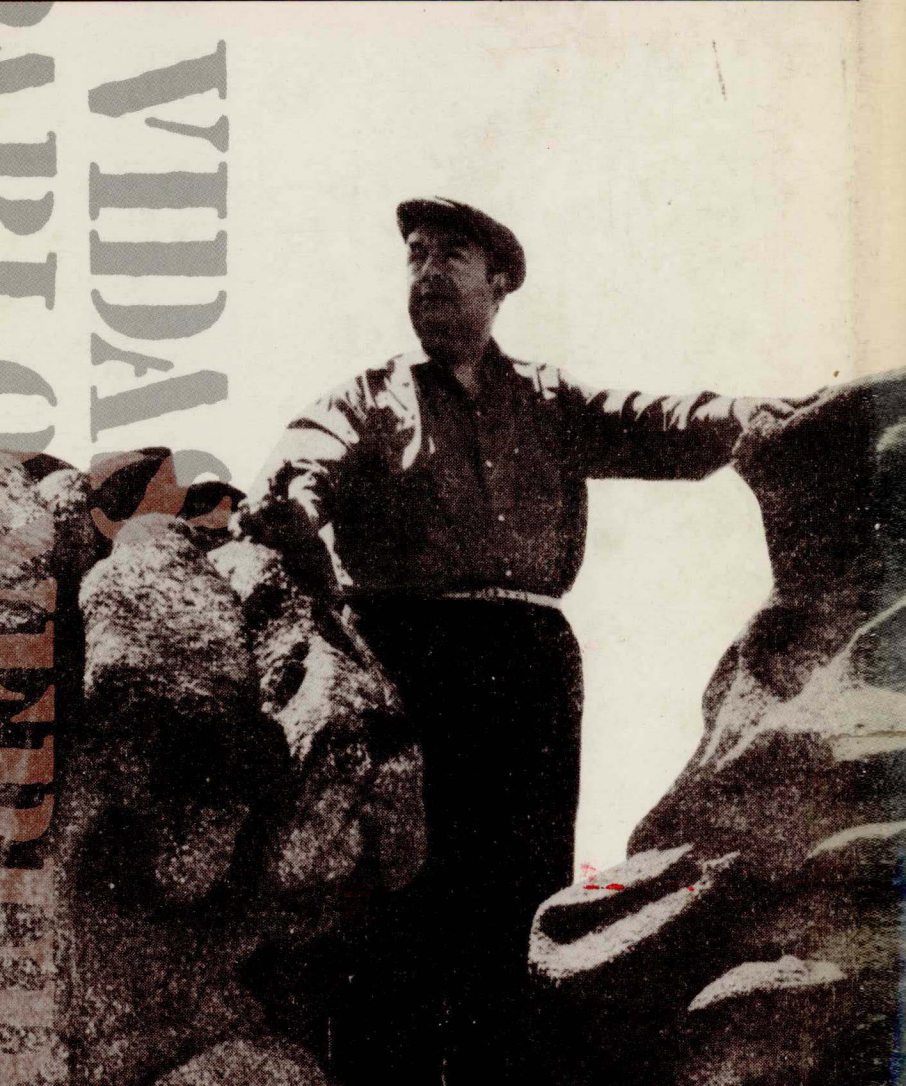
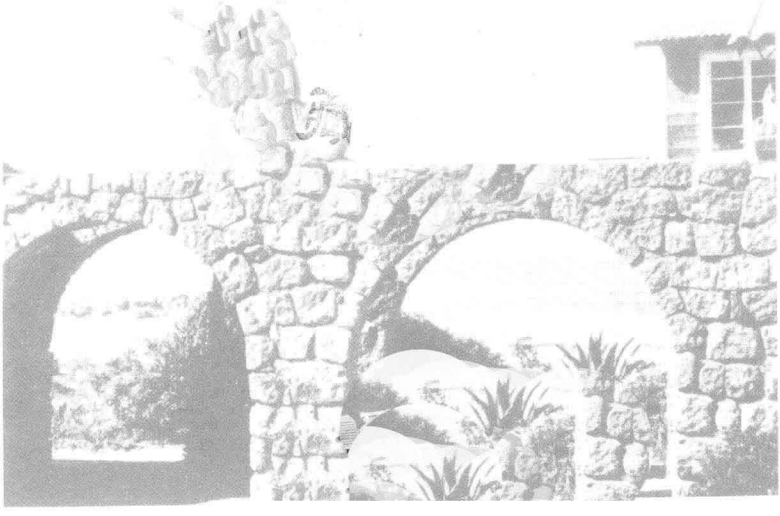
パブロ・ネルーダの生涯

マルガリータ・アギレ
松田忠徳訳



パブロ・ネルーダの生涯

マルガリータ・アギレ　松田忠徳訳



LAS VIDAS DE PABLO NERUDA
© 1973, GRIJALBO S. A.
Belgrano 1282, Buenos Aires, Argentina
arranged with Margarita Aguirre care of
AGENCIA LITERARIA CARMEN BALCELLS
Japanese rights by arrangement through Orion Press, Tokyo

訳者紹介

松田忠徳（まつだただのり）
1949年北海道生まれ
東京外国語大学大学院卒業
現在　翻訳家
主な訳書　『世界黒人詩集』（飯塚書店）
『ネルーダ・愛の手紙』（東邦出版社）
『新しいアフリカの文学』（白水社）
『長編叙事詩・墓場にて』（恒文社）
などがある。

パブロ・ネルーダの生涯

1982年3月30日　初　版　　定価2500円

原著者　マルガリータ・アギレ
訳　者　松　田　忠　徳
発行者　松　宮　龍　起

郵便番号 151　東京都渋谷区千駄ヶ谷3—11—8
発行所　株式会社　新日本出版社
電話　東京（478）3311（代表）
振替番号　東京　3—13681
印刷　亨有堂印刷　　製本　小泉製本

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします．
本書の内容の一部または全体を無断で複写複製（コピー）して配布することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害になります．小社あて事前に承諾をお求めください．

はじめに

わたしは『天才と肖像』叢書のために、初めて本書を書きました。これはホセ・ビアンコの依頼を受けての執筆でした。彼はこの全集を、エウデバに謹んで献呈したのですが、彼はわたしを信頼してくれている無二の友人で、絶えずわたしを励まし、忍耐をもってわたしを導いてくれました。本書は彼のおかげで書き上げることができたもので、わたしは彼に対して深謝の意を表したいと思います。

さらに他の方々にも御礼を述べたいと思います。ネルーダの資料を貸して下さったホルヘ・サヌエサ、一九二七年から一九四三年にわたって受取ったネルーダの手紙を見せて下さったエクトル・エアンディ、本版中の写真の大部分をお願いしたマヌエル・ソリマノ、ハンス・アーマン、アントニオ・キンタナ、アンヌマリ・ハインリッヒ、ブッキー・トレス、そしてメルクリオ新聞社の資料室にはいる手筈を整えて下さったパウリナ・マーチャント、およびエル・シグロ新聞社の文書室に通して下さったボロディア・ティテルボイム。こうした人びとに対して、変わることのない感謝の意を表する次第です。

エレナ・アラオスは、本書の再版の引伸ばしと校正にあたって、精力的に、かつ綿密にこの仕事を手伝ってくれました。タイプを打ち、オルジナルの講演を聴きとり、わたしの疑問を解いてくれ、何よりも彼女の存在はわたしにとって一つの大きな励みでありました。この友人に対する感謝の気持も深いものであります。

最後に、わたしの愛する、尊敬すべき友人マチルデ・ウルティアとパブロ・ネルーダの二人が、わ

たしの質問に快く答え、面会して下さったことに、一九六二年に一緒にテムコに旅したときの忘れられない思い出とともに、衷心より感謝したいと思います。

一九七三年　ブエノス・アイレスにて

マルガリータ・アギレ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

パブロ・ネルーダの生涯　目　次

はじめに　1
河　9
そこには歴史ではなく、大地がある　20
陰のなかに　22
アラウカニア　24
運転士レイエス　28
ママドレ　38
辺境にある典型的な家　41
刃物職人モンヘ　44
リラの香り　51
忘れがたき像　56
わたしの愛は木だった　58

学　校　62
最初の詩　67
本　70
情熱と不屈　81
ガブリエラ・ミストラル　86
夜汽車　99
マルリのたそがれ　103
つば広帽子とマントの詩人たち　111
祭りの歌　127
奇妙な経験　132
愛のための二百万冊　135
雑然としたあの日々　142
遍歴の騎士として　148
地上の住みか　158

エクトル・エアンディへの手紙 172
ブエノス・アイレスでの領事 184
私的なうちあけ話 189
心のなかのスペイン 194
アメリカよ、わたしはいたずらに
　おまえの名を呼び求めはしない 210
葡萄畑と風 251
ネルーダの描写のために 258
詩人の家 263
巻き貝と海 276
基本的なもののオード集 283
愛が名前をもつ 293
本当の船長 308
百の愛のソネット 321
武勲物語歌 324

儀式の歌 334
『燃ゆる剣』の詩人 361
常なる河 371
わたしは生きる 378
パブロ・ネルーダ年譜 383
訳者あとがき 399

パブロ・ネルーダの生涯

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

河

永年ランコ湖の奥を散策していて、わたしは、祖国の源、あるいは全自然界の攻防のなかにある詩の源泉というものにめぐり会えたような気がした。

空は、糸杉の高い梢の間にその姿をくっきりと現わし、風は茂みに宿る香をかきまぜ、すべてが声を持ち、静けさがあたりを支配していた。姿を見せない鳥たちのさえずり、落ちていくとき葉の茂みを撫でていく木の実や枝もみんな、秘められたおごそかな一時に息をとめていた。密林のなかでは、すべてが待ち受けているかのようだった。

誕生はさし迫っていた。生まれいづるもの、それは一つの河であった。何という名前かは知らないが、その最初の暗い、汚れない流れはほとんど目に見えないもので、朽ちはてた大木と巨大な岩のあいだに出口を探し求めていた。

河の源に何千年ものあいだ堆積されてきた葉、そう、過去はいつでも流れをとどめたいと欲していたが、ただ流れて行く道に香を放つだけだった。若い河は、老いて死に絶えた葉を押しのけ、流れに沿って川べりにもたらすべき、新鮮な養分をいっぱいにたたえていた。

わたしは思った。詩の誕生もこのようなものではないだろうかと。目に見えない高みからおりてくる詩は、その源を暗く秘密なものとし、孤独で、かつかぐわしい。そして河のように、流れに落ちればすぐに流れに溶けこみ、山あいに道をもとめ、牧場ではその美しく通る声を響かせるにちがいない。

田畑をうるおし、飢えたものにはパンを与え、穂のあいだを進んでいく。道行く人びとは、河で喉の渇きをいやす。そして、人びとが戦い、あるいは休んでいるとき、河はうたう。

そしてそのとき、人びとを結びつけ、村を築かせ、生命の繁殖力を木の根にもたらしながら、谷間を縫っていくのだ。

歌と豊沃、それが詩なのだ。

秘密の内面を残し、豊沃と歌とを生み出しながら河は流れる。加速された動きをともなって、エネルギーを燃やし、小麦粉をつくったり、皮をなめしたり、木を切り、あるいは町に光を供給したりしながら、河は働く。河は役に立つもので、岸辺に旗を立てながら現われる。祭りは歌うたう流れのほとりで催される（一九五四年七月十二日、チリ大学での講演より）。

チリ南部のはるかな町テムコで、パブロ・ネルーダの声は、「朽ちはてた大木と巨大な岩のあいだに出口を」探し始めた。

やがて彼の詩は世界中に氾濫した。「それは大陸の一本の河のようである」と、ネルーダにノーベル文学賞を授与するとき、スウェーデン学士院事務官は述べた。

この賞は、すでにひろまっていたネルーダの名声を、不動のものとした。事実、ネルーダはかなり以前から、地球上のあらゆる言語に翻訳されてきた。また彼の詩は絶えず書きかえられもしてきた。専門的な評論家にとっては、その過程が研究分野として残るのだが、わたしは彼の生活面での伝記作家として、わたしたちの時代の、一人の男性のなかに示されてきた変化、盛衰をいちずに追っていきたいと思う。ネルーダは自分自身の内にも、またこの文明社会の日常の出来事のなかにも、閉じこもってしまうようなことはなかった。愛、政治、夢、情熱、感情、そして知性が、彼の詩界の河を深めている。彼はほとんどこのことを意識していない。彼は語った。あなたの詩はどんなものか、という質問があれば、「わからない」と答えなければならないが、わたしの詩にパブロ・ネルーダとはどのような人物か、と尋ねるなら、答えはかえってくるだろう、と。

彼の詩は無意味に民衆の生活を素通りして、ノーベル賞を獲得したのではない。この賞はただ創作に与えられるだけではなく、人類の平和と進歩に対して好ましい影響をもたらしたという功績に対しても与えられるものであることを、アルフレッド・ノーベルはその遺言のなかで定めたのである。

スウェーデン学士院事務官であるカール・ハグナー・ヒーローは、授賞を発表する際、次のように述べた。

本年度のノーベル文学賞は、論議の的となる一人の作家に与えられることになった。この論議はここ四十年間続けられてきたが、そのことは彼の貢献が明らかであることを証明するものでもある。そして、この論議は、彼の作品の芸術的価値に関しておこなわれてきたものである。彼の同僚のうちの二人がある集まりで言明したことはよく知られている。まだ三十歳にならないときに、ネルーダはチリ領事として赴任するためにバルセロナへ上陸した。そこでガルシーア・ロルカ（一八九九―一九三六、スペインの吟遊詩人。スペイン市民戦争中、フランコによって銃殺された）が彼の叙情的な色彩をもつ言葉と、今はすでに有名になり古典のなかに組みいれられてしまった言葉でネルーダを迎えた。「哲学によりももっと死に近く、知性によりも悲しみに近く、インクによりももっと血に近い詩人。彼は幸せなことに、自分では解明できない神秘に包まれた声に浸っている。銅像の固い頬よりずっと永遠のものは藺草と燕であることを知っている本当の人間、それが彼である」。

ガルシーア・ロルカが若い同僚に向っていった言葉、それは釣り合いがよくとれていると同時に、霊感あふれる言葉なのだが、それを即座には受け入れたがらない者は、ファン・ラモン・ヒメネス（一八八一―一九五八、スペインのノーベル文学賞受賞詩人）が簡潔に述べた言葉ならよくわかるだろう。「大いなる悪しき詩人！」

ネルーダの詩才がわたしたちの耳に親しまれてきたわけは、彼の詩の女神がわたしたちを服従させずにはおかないような素晴らしさのためだ。詩作の流れにおいて同じことが存在するなら問うていくことができる。十三歳で彼は処女作を発表し、二十一歳ではすでに名の知れた詩人であり、四十五歳のとき、及び一連の作品を書き終えてからは全集のごく一部に相当する分しか書い

ていないが、一九六二年にはその全集が二千ページにも達していた。二年後、六十歳を迎えると『イズラ・ネグラの思い出』と題する五巻から成る詩集を発表した。その後も、数多くの作品が世に送り出され、そのなかには『舟歌』のような傑作があるが、このような詩の波のなかではそれらを一つの短い紹介ですませようとしても、十分な説明を施すことは不可能であろう。

無限の彼の詩の世界から一つの詩、あるいは詩集を選び出そうとすれば、それは愚にもつかぬことだろうし、それはスプーン一つで五万トン級の船舶の排水を試みるのと同じようなことなのだ。わたしたちはパブロ・ネルーダの作品を綜合することはできないし、それは彼自身すらも成し得なかったことなのである。

こうしたネルーダの巨大な文学作品全体がすべて同じレベルにあるとしたら、それはまったく思いもかけないことであろう。ネルーダの詩の弱点を見つけたいと望む者は、そう時間をかけることなくそれを見つけ出すことが可能だ。またその詩の長所を見つけたいと欲する場合には、決してそれを探し求める必要などない。最初の文学的デビューから彼の最後の作品にいたるまで、無尽蔵の富をいたるところに見い出すことができる、といい切ることができるからだ。もっとも顕著なことは、明らかに年月とともに彼の霊感が積み重ねられてきたということだ。それらのひとつひとつはネルーダ大陸の河の一部のようなものである。つまり、その河は、両岸が視界からはみ出してしまうほどのひろがりをもち、河口に近づくと一層その勢いを増していく流れなのだ。

彼の燃えるような創作活動は、彼の歩みを阻むというよりはむしろ彼を駆りたて、文体の変形、動機の更正、考え方の修正、そして感情の転移などにおいて不断の前進へと彼を突き進めた。細心の気の配り方や、語彙の壮麗さに欠けること、そして彼のがさつな雑然とした比喩と比べると、ヨーロッパの超現実主義的詩風は、手引書や目録で読んだことのある誰かの練習曲のようにさえ思われる。あたかもその幻想が同一の言語と比喩的言語の創造に、形は異なっていても

じかに、そして神秘的に結びついているかのようだ。ときに陰気で、親しみやすいと同時に挑発的にもみえ、少なくともわたしたちは彼の莫大な量の詩のなかから彼をこのように感じとることが出来る。

しかしながら、彼の初期のすぐれた作品とは大きく変化して、その道のはるか彼方、飾り気のない素朴さに彼の目は向けられているのを、わたしたちは時たま、より新しい詩のなかに見ることができる。まだ大部分は、内面的な心配や青春の悩みから、未来の輝かしい夢へと向けられた目との戦いの詩への過渡であって、そこからずっと、彼の目くらみが消えたときに彼に続いて起こる苦しい失望が続いている。経験がわたしたちに与えてくれる知識を彼は見つける。

彼の詩のなかの一つがわたしたちに語る。「そのとき、ぼくは子供から脱皮した。なぜなら、ぼくの人びとには生が認められずに墓場から拒まれていないと悟ったからだ」。その瞬間にネルーダは決定的な一歩を印し、社会のなかでの孤立から抜け出ていく。彼は、征服者の時代からずっと抑圧されてきた紫色のわが故郷を見つめる。そして彼自身は祖国から追い出され、追放されたにもかかわらず、決して諦めなかった。抑圧された人びとの社会というものはどこにでもある。これこそ彼が絶えず求めてきたもので、激しい人間性の詩人をとりまいていたものなのである。

ネルーダ独自の詩を聞いて、わたしは本書をまとめあげた。彼の新版の全集三巻を読みあげるには何日も何日もかかる。人間、そして詩人としてのネルーダのひとつの像を与えてくれるであろうとわたしが考えている詩の断片を、ここに読者は見るであろう。ネルーダは良心、感受性、現代の輝き、「激しい人間性」のひとつの象徴でもあるのだ。

こうしたことはわたしよりも、ネルーダの作品研究に専念しているエルナン・ロヨラの方がより適切に述べている。ネルーダの『選集』へのプロローグのなかで、ロヨラは次のように述べた。「ネルーダの詩が示している高いレベルというものは、自分自身を洞察し得た一個の人間の勝利がどのよう

なものなのかを物語ることと、さらにはその独得な冒険をおかすような一字一句に対する批評という形でのみ、何百万人もの人びとに言い表わすことができるのである」。

本書をよりよいものにするには、ネルーダの詩が生まれた町テムコへ行くことが不可欠であるように思えたので、一九六二年の夏、ネルーダ本人と夫人のマチルデ・ウルティアに同行してもらって出かけた。夏、この短い季節に、雨は降らず、チリ南部では根に水分をたくわえた木々の緑が深く、空気は澄み渡っていた。

最初の訪問先は、パブロの叔母グラスフィラ・マソン・デ・レイエス夫人宅だった。彼女は今生きている親類の人のなかでは最年長で、父方の親戚である。わたしがパブロについて書こうとしていることを知って、彼女はわたしにこういった。

「パブロは、いつもかしこい子でした。多分、才能があったのでしょう。わたしの伯母の家で、ある晩集まりがありまして、その場には仲の良い女友達がおりましたものですから、パブロは大きな目で彼女たちを見ていました。わたしたちはなぞなぞをして遊んでいました。『あなた、どうして何もいわないの？』と皆がパブロに聞くと、彼はかすかな声で、庭をみやっていったのです。『羊毛はあるけれども羊ではない。鋭い爪は持っているけれどもつかまない』。誰一人当てられませんでした。パブロは立ち上がり、指さしました。『あそこにある皮さ』。それは食卓に供されるために少し前に殺された羊の皮だったのです。わたしたちのうち誰一人としてその皮に気をとめていませんでした。葡萄棚にかかっているのを見ていたにしてもです。けれども彼は注意して見ていたのです。やはり彼は詩人です」

老女はかすれた、しかし地方の女性の賢明さを備えた声でいう。

「誰も見ないものを見る、それが詩人です」

沈黙の後、またグラスフィラ夫人は続けた。

「静かで弱々しい人ですが、鉄のような意志の持ち主です。彼の初期の詩作は、彼にとってはたい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.